

---

# 「フグ」

長根兆半

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「フグ」

### 【Zコード】

Z3065F

### 【作者名】

長根兆半

### 【あらすじ】

ポンポコ・スッポンポンポンボンボン・ボンボンスッポンポンガム公、グミ助、チョコ坊の3人が繰り広げるコメディー小説。

## 「フグ」

ポンポコ・スッポン  
ポンポコポン  
ボコボン・ボコポン  
スッポンポン

フグ食うと、フグ死ぬぞ・・・。なんていう駄洒落はお遊びとしますが、ま、御経験のある方は少ないと私は思いますが、フグ毒を少し舐めてみますと、歯医者さんで麻酔をされた時の様になるんだそうです。

口の周りが、なんとなくだらしなくなつてゐるような気がする、あれです。

ところがフグ毒は神経毒で、氣の毒ですが、神經が利かなくなつたそうです。

さらに、ノドへ行き、氣管支へ、そして肺へいき、肺が利かなくなつてしまふんだそうです。

フグの刺身を俗に鉄刺。ちり鍋を鉄ちり。なんて言いますが、これは鉄砲を、撃てば当たると言う事から、フグを食べますと毒に当たる、と言う事をかけているわけとして、それで、鉄砲の鉄を取つて、こいつ言つのです。

ですから、役者さんなどは、役が当たるといつ縁起を担ぎまして、講演前に召し上がるのだそうです。

あの、有名な歌舞伎の板東三津五郎さんも、其れで召し上がつたのですが、量が多くつたようで、本人には氣の毒とは思いますが、板前さんが可愛そうでした。

有名な俳諧の人は、フグを食わなきゃ 一人前じゃないなんていつて

おいて

「俳諧の　ために河豚くう　男かな」（虚子）なんて皮肉つていま  
す。

「フグは食いたし命は惜しい」なんて川柳が有りますが、正直でい  
いです。

知ったかぶりに、素人さんがやつてはいけません。フグ毒の名前を  
テトロト・トキシンと言つのだそうですが、無色透明無臭と来てい  
ますから、始末が悪い。

ですが、真水では洗い流せますから、ああそうですかとなります  
が、安心は出来ません。

毒の強度はマウス、あのネズミで測るんだそうです。一グラムの毒  
で、二十グラムのネズミが死ねば一十マウス、十万匹死ねば二十万  
マウスといって、毒を二十グラム食べると人間は死ぬのだそうです。  
鮪の刺身が一切れ約十グラム、一切れでハイ・サヨナラとなるんで  
すから。いきがつてフグの肝臓とか卵巣、目など、血の氣のある内  
臓には絶対に手を出してはいけません。ですから、フグを調理する  
には國家試験があるわけです。

一匹のフグを二十分で、五臓六腑を切り分けるわけです。この二  
十分には色々わけがあつて、お客様が待てる限度とも、フグ毒の見  
分けの速さを見るとも言われています。

さてグミ助、こうした事、ああしたことを勉強しまして、親方から  
頂いたフグ庖丁を携え、今日がその試験日。革ジャンのガム公が付  
き添つてきました。

「指切るな。試験はペケでも仕事は出来るが、指切つた日にや、明  
日の仕事に障るからな」

「ん・・・」

「出刃つてなアな、出歯つて言つくらいだ。噛み付かれたら傷は大  
きいぞ」なんてガム公が歯をむき出したりしながら、二人で試験所  
に来ました。

板前さんと言うのは、調理場にいますと、威勢が良いのですが、ど

うもこの、外に出ますつてえと、借りてきた猫のようになるようでおとなしい。それでも、刃物所持公認なもんですから、いかにも人相が悪い。眉毛のない人。妙に青白い顔の人。半顔崩して鼻で笑う人。猫背で頸をしゃくる人。ポケットに手を突っ込んで肩をすぼめ、天を見上げている人。

「お兄さん、ちょっと失礼いたしやす」って言いたくなるような人ばかりが五、六十人。

この板前さんが調理場に入りますと、コアラかパンダにでもなつたように愛想がいいのですから、憎めない。

まずは筆記試験。次が五種類のフグの鑑別。最後が除毒調理。ガム公は、いても仕方ないので、近くでお茶でもと思つて試験所の外に出ると、しつとりと着物を着こなしたチョコ坊が向こうからやつてきました。

「あれ、どうしたい」

「どうもしないけど、近くまで来たから、ついでよ」

「そうか、そのついでに丁度良い、お茶するか」

「あら、いいわね、たまには外でつて言うのも・・・」

「いきなり若返るんだな」

「フフ、照れてんのね」

「・・・カラカイやがつて、じゃ止めるか

「意地悪、嫌い」

「はは、悪かつた、謝る、謝るから、出して」

「なにそれ、つたく、分かつてるわよ」と、いつものことながら戯れながら入った喫茶店。

なるほど、受験する板前さんと来た方々が一杯。難しい顔で、腕組みをしている人、先輩でしょう。

ガム公、昔を思い出し、親方もこうしていくくれたんだな。グミ助のために、俺は来てよかつた。そう思いながら、腕を組んで目を閉じます。チョコ坊、気にもしないで

「ねね、何頼もうかしら、もうすぐ冬ね、寒いから、ココアにしよ

うかしら・・・」言つて、ヒョイと前に座つてゐるガム公を見ます  
つてえと、眠つてゐる。

まあ、寝つきのいい人つているもんです。座つた途端にもう、寝ち  
やうんですから。

そういうえば、タベ、居間でグミ助に受験の手解きを、遅くまでやつ  
ていた事を思い出し、ココア飲み終わるまで、なんて独りで決め、  
コートを脱いで、なんとなく周りを見渡します。

入り口あたりで、カヤカヤと華やいだ声がします。見ると、銀行マ  
ンと一緒につた友達が、さすが銀座育ち、カジュアルがよく似合  
つて、三人連れでいます。チョコ坊すぐ立つて行き

「おはよ」

「ああら、チョコ坊どうしたのこんな早く。珍しいこともあるわね  
「ん、ちょっと付き添い」と言つて、寝てゐるガム公を振り向く。

友達が、チョコ坊の視線を追つてガム公を見ますと

「あら、知つてるわよ、あの方。噂でだけど、板前さんでしょ」

チョコ坊、ちょっと嬉しい。すると別の友達が

「ねね、来月私の誕生日なんだけど、頼もうかしら

「あら、ぱあーつといくわけ?」

「三十路も半ば過ぎ、控えめよ。「自宅だと面倒でしょ、だから、  
どつか座敷のあるお店でと思つてゐるけど」するとチョコ坊

「あら、だったら活春がいんじやない」

友達が、あすこ、美味しいのよね、値段の割りに。ふうんと頷いた本  
人。

さて、フグ試験が終わつて、一月後に発表があり、見事グミ助は合  
格。

さつそくチョコ坊の家で、昼飯兼用のハンガリーワインで乾杯。

「よかつたなあ」

「ん、兄イのおかげだよ」

「ねね、友達の誕生日に、腕振るつてもうおつかしら、今日」

「今日?」

勝春に取つて返したグミ助、合格を胸に抱き、お客様の誕生会。まず、ヒレ酒で乾杯、煮凍りの突き出し、白子焼き、鉄刺の鶴、ダイダイをベースにした柑橘類に、昆布や鯉のだしが利いてるポン酢で召し上がる。そして葛きり、切り餅も添えた鉄チリ。華やいだ誕生会、やはり女性、歳の話になる。

そこに、店の若い女性がお酒を運んで来た。

すると誕生会本人が、彼女を見て

「いいわね、若いつて」と言うと若い女性、冗談のつもりか  
「ああ、あ、私も明後日が誕生日、二十一、もうフグ、お婆になつ  
ちゃう」

やれやれ、そろそろ一服アラドツコイ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3065f/>

---

「フグ」

2010年12月29日14時36分発行